

# 刀 箸 考

高 倉 洋 彰

## I 箸文化の一体感と個性

ベトナム・中国・朝鮮・韓国・日本を主とするアジアの東辺には箸を使って食事する習慣があり、文化的な一体感を醸し出している。もともと箸の使用は中国で始まり、次第に周辺に広がったもので、現在では中国食・韓国食・日本食などの世界進出にともない箸を使う食事法は世界中におよんでいる。

アジア東辺部の箸を使う食事法は、ナイフとフォークを使い、あるいは直接手を使って食事する習慣をもつ人びとの目には一様に見えると思われるけれども、実際には民族・地域によって大差がある。

ご飯茶碗・汁椀・副食用皿が並ぶ日本の食卓で、横向きに置かれた箸は食のすべてを口に運ぶ万能具の役割を果たす。箸ではつかめない汁物は椀を口元に運び、口を付けて吸う。ところが身近な外国である韓国の食卓では箸と匙が縦向きに置かれ、ご飯と汁物は匙で食べ、副食を摂るときに箸を使う。ご飯を箸で食べることはなく、汁物を匙ですくうために食器を動かす必要もないから、食器を持つことは無作法になる。箸と匙（蓮華）を使うことと置き方の方向は中国も同じだが、ご飯・副食ともに箸を用い、椀を持って無作法ではない。以上を表にまとめると、次のようになる。

	中国	韓国	日本
箸の用途	ご飯と副食の摂取	副食の摂取	ご飯と副食の摂取
匙（蓮華）の有無	有	有	無
箸の置き方	縦	縦	横

中国に源流をもつ箸の文化ではあるが、伝播してからの永い年月が、上記のような個性をもたらしている。そして、この中では韓国の箸と匙の使用法が古来の礼儀にかなっている<sup>(1)</sup>。

## Ⅱ 刀箸の研究史

**刀箸の形態** あまり知られていないが、Iで述べた箸とは異なって、食事に刀（ナイフ）と箸を用いる民族・地域がある。刀箸（中国では刀筷子もしくは刀筷とよぶ<sup>(2)</sup>）がそれで、単に刀と箸を用いるのみならず、双方が一つの鞘に納まるように作られていて、腰に帯びて持ち運べる携帯用食具である。まず実例を図1で紹介しておこう。



図1 刀箸の形態と組合せ

1は、木製の鞘に刀と箸が納められていて、全長約33.2cmをはかる大形の例である。鞘は長さが23.4cmあり、長円形の口部は刀を挿しこむために中を刳り貫き、それに箸を挿すために内側を刳った半長円形の凸状部材を貼りつけている。これらの加工された木材を補強するために、龍文を型押しした真鍮製の締め金具で留めている。鞘口から1.5cmのところの足の円環に鎖をつけ、その先端に鉤をつけて腰に帯びるよう配慮している。これに挿す箸は駱駝骨製で、頭部を角張った擬宝珠状に削っている。全長26.6cmをはかり、長い。刃渡り19.4cmの刀は鑄の厚さが4mmもある頑丈なもので、血流しのための樋をしつらえている。木製の柄は11.5cmあり、柄頭を鞘と同じように型押しした文様で飾るが、関部はすべりをよくするために文様はない。形態・刃部からみて生活で実用された刀箸である。

2は、骨製の鞘に、同じ素材の骨で作った箸と、柄を骨で飾った刀が挿しこまれている。何の骨かわからないが、駱駝の骨ではなく、ヘラジカやトナカイなどの鹿類<sup>3)</sup>と思われる。全長は27.2cmで1にくらべて一回り小さい。鞘は長さ18.9cmをはかる。全体を真鍮で成型し、表裏に骨材を当て、横の隙間を細い骨材で埋め、鞘尻をやはり骨で塞いでいる。それらを真鍮製の締め金具で留め、骨製鞘に仕上げている。全面を細かに毛彫りした龍文で飾る。口部から1.5cm下に円環があり、1と同様に鎖と鉤で腰に帯びたのであろう。鞘の裏側には細長い孔が彫られ、同じ骨製の楊枝と耳搔きがそれぞれ1本納められている。箸の長さは19.0cmと短く、頭部を角錐状に削っている。刀は刃渡り10.2cmで、柄部を骨で挟んでいる。全長でも19.6cmしかなく、果物ナイフを思わせる大きさである。1が実用的であったのに対し、2は装飾品的な雰囲気がある。

これら2例は内蒙古自治区呼倫貝爾市で収集したが、蒙古刀篋とあったので、モンゴル（蒙古）族の刀箸と判断している。

**既往の認識** このように刀箸を理解したところで、まずその研究の歴史を紹介したいが、諸書の片隅に簡単に紹介されている程度で専論はない。そこでそれらの中で比較的詳しく紹介されている書物の関係部分を抜粋してみよう。

その著『箸の文化史』が平成3年度に毎日出版文化賞を受賞したように、箸

文化の研究に大きな足跡を残した一色八郎は、同書に「世界の箸」の一項を設けてモンゴル族の刀箸を「蒙古刀」として紹介している<sup>(4)</sup>。やや長いが、刀箸のイメージがここから生じているので引用しておく。

モンゴル人民共和国<sup>(5)</sup>(外蒙古)と内蒙古自治区では、草原で生活する遊牧民は、天幕(説明略)というテント式住居に住んでいる。彼らが身につけているナイフ(ホタクツ)の鞘(ヘト)には、箸(サバハ)がセットになっている。これは羊を屠ったときは骨付で料理し、肉はナイフで削ぐ要領で切り、ナイフに肉を乗せたまま口に運ぶ。また刺身を切るようなリズムで切って食べるので、このナイフを「処分刀」ともいう。

食事中ナイフの先を相手に向けて出すことは禁止事項で、宗教的な意味はないが、日本でいう「嫌い箸」の一つとされ、モンゴルの人はこれをとていもいやがるとされている。

このナイフと箸を納めた鞘は、細工を凝らし宝石を散りばめた豪華なものが多い。箸は象牙や骨や銀製であり、細かな彫り物がついているものもある。

一色にはこの著書を一般向きにした『箸(はし)』という文庫本がある<sup>(6)</sup>。その両方の写真の説明で刀箸を「蒙古刀」と表現している。蒙古刀とする例は向井由紀子・橋本慶子の説明<sup>(7)</sup>にもあるので、紹介しておこう。

中国の北辺の内モンゴルでは、男たちは蒙古刀(ホトガ)の鞘にセットされた、箸先が金属製の箸を持っている。このセットには楊枝が三本も納められたものもある。しかし、モンゴルのホトガには刀だけで箸はついていない。ここでは、特別の行事などで羊を屠った時は骨付きのまま料理し小刀で切って食べ、貴重なビタミン源として摂る磚茶は小刀で削って食べるか、煎じて飲む。羊の乳はチーズやバターにして、中国との交易によって得られた穀類は団子や煎餅状に作り、手で持って食べる。麺類を食べる時には箸を用いる。

一色や向井・橋本の説明を読むと、蒙古刀(刀箸)は日常生活の食卓で用いられているとも読み取れる。2002年夏の内蒙古自治区での筆者自身の体験では、

食卓にはナイフと箸が置かれていたが、ナイフと箸が鞘にセットされているわけではなく、鞘そのものがなかった。ナイフと箸は別々に用意されており、向井・橋本のいうモンゴルのホトガはこの状況を指すと思われる。通遼での食事の際に老村長に刀箸のことを聞いたところ、昔は使っていたと答えていた<sup>(9)</sup>が、それが日常の食卓かどうかはわからない。このとき筆者は、茹で上がって熱い羊肉の塊を箸で押さえて刀で切り分け、小片となった肉を箸で口に運んだが、村長はそれが刀箸の使い方だといっていた。しかし現代の日常生活ではわざわざ刀箸を用意する必然性は弱い。ナイフと箸を別々に用意していたほうが楽だからである。

中国の著作で刀箸にふれたものをみると、一色や向井・橋本と同様に刀箸を蒙古刀とよんでいる例がある。モンゴル族の研究者である納日碧力戈は、モンゴル族が騎乗して外出するときに腰に帯びる用具の一つとして蒙古刀をあげ、次のように説明している<sup>(9)(10)</sup>。

蒙古刀は青年男子の重要な工作具兼装飾品であり、ただ肉を食べるときに用いるばかりでなく、男子の重要な体育娯楽活動である狩猟にも用いる。蒙古刀には手の込んだ細工をされた鞘があり、人びとは常に柄のついた刀と一組の箸（駱駝の骨や象牙で作られた箸）を鞘に納めている。鞘には精巧で綺麗な文様や図案がほどこされている。鞘には刺繍用の絹糸で房飾りのように編まれた“套海”（銀や銅のような金属で房を締めている）を掛ける。出かけるときはいつも“套海”で飾られた蒙古刀を右側の腰帯に差している。蒙古刀はモンゴル族男子の屈強で勇敢な性格を体現している。

このように一つの鞘に箸を常備した刀をモンゴル族自らが蒙古刀とよぶのだから、それがモンゴル族における正式名称であることは疑いない。にもかかわらず、博物館の展示や著作の引用の多くで蒙古刀とよばれることはなく、一般に刀箸・刀箸とされている。それに、後述するようにこの種の刀と箸はモンゴル族固有のものではないから蒙古刀の名称は不適切であるし、刀と箸が組み合わされているという特徴も伝わらない。遼寧省大連市で中国箸文化陳列館を主宰し、箸研究を先導している劉雲は蒙古刀の名称を用いることはなく、刀箸と

定義している。そこで本稿でも劉にしたがって刀箸の用語を用いることにする。その劉は主に第12章の「箸文化在蒙古，東南亜」で刀箸を次のように紹介している<sup>(11)</sup>。

モンゴル人民共和国と中国のモンゴル人は同種で、遊牧生活を主とし、携帯と食事の便宜のために、今にいたるまで彼らは皆好んで箸と刀（ナイフ）がセットになった食具を用いる。牧畜民たちは身体に帯び携帯している（動物の）解体用の刀の鞘に箸を備えている。男性は腰に帯びた刀で羊を屠り、食事の時に羊肉を骨から削り取ったり、切ったりする。食事のときには、箸で肉を口まで運んでほおぼるが、刀の先で肉を口まで運んでほおぼることもある。女性が用いる刀はおおむね肉を切るのにだけ用い、箸で肉を口元まで運ぶ。子供も刀箸を使うが、その刀箸は少し小さくて軽く、使いやすい。

モンゴル人の刀と箸を納める鞘は大変精緻で、昔の貴族が使ったところの鞘は白銀、珊瑚、象牙などで飾られ、細やかに加工したサファイアを嵌め込まれたものもあり、さらにカラフルな紐や帯、さらには装飾を凝らした火打石<sup>(12)</sup>で飾られたものもあり、非常に豪華である。箸は一般には象牙で作られるが、銀をあしらった象牙箸や白銀箸、さらには黒檀や赤木で作られた箸もある。

一般の牧畜民が使う箸の大多数はノロシカ、駱駝、四不像<sup>(13)</sup>の骨やその他の獣骨で作られているが、蘆葦の茎を使った箸もある。装飾された刀箸を納める鞘の多くは木製で、白銅片を嵌め込んだものや、獣皮などで簡単に飾っているものがある。

モンゴル人の箸にもいくつもの禁忌があり、食事のときに刀の切っ先を相手に向けたり、椀の上に箸を横向きに置くとか、箸で人を指すなどのことは礼儀作法にもとる行為とみなされている。

ということになる。3書に共通するのは、刀箸をモンゴル族に特徴的なものとみなしていることで、日常の食事に加えて、家畜（羊）の解体に使うという用途が述べられている。しかし動物の解体に刀が必要なことはわかるが、なぜ箸

も必要なのであろうか。それには3書とも答えていない。ところで、劉雲は具体的な説明をしていないものの、オロチョン（鄂倫春）族の刀箸の写真<sup>(14)</sup>を載せており、モンゴル族以外にも刀箸を使用する民族がいるという点で、注目に値する。

黒龍江省西部から内蒙古自治区北部にかけて南北にのびる大興安嶺一帯に住むオロチョン族が刀箸を使用する場面をテレビで放映したことがある<sup>(15)</sup>。狩猟のために簡単なテントで野営をする彼らは、夕食をはじめるにあたって木の枝を刀（ナイフ）で削って即席の箸を作り、それで椀に盛られた酒を払って周りを清め、火の神、さらに天・地・太陽・月・馬などの神に感謝の祈りをささげる。その後には食べはじめが、このときに使われた箸は使い込まれた淡い鉛色の骨製箸だった。肉を食べるときは、歯と手で肉塊を伸ばし、口元近くで器用に刀で切っている。木を削り食事に使った刀は、狩りで倒した獲物の解体にも使われる。重さ300kgもあるヘラジカのような大型獣は、そのままでは重くて運べないために、小さな肉塊に解体する。このように刀は獲物の解体、食事から木の細工まで幅広く使われ、箸は食事に用いる。狩りの場面では、刀箸は腰の右斜め後ろに吊られている。脇差のように腰帯に差す例もある<sup>(16)</sup>。ともあれ、野営地では身の回りの小物などの管理は自己責任になり、腰に吊り下げただけで携帯に便利な刀箸はその目的に合致する。

この事例から、モンゴル族の刀箸も遊牧生活に適応した狩猟用および家畜解体用のものであるとみなされる。そして遊牧中であっても天幕（包）で一時的に滞留するような場合には、羊などの解体には刀箸は用いずとも料理用の鋭利な庖丁で十分だから、刀箸の本義は狩猟用携帯具であろう。日常の食事にはナイフと箸を用意すれば事足りるから、定住生活の普及とともに刀箸は今後次第に使われなくなっていくと思われる。

### Ⅲ 刀箸の実例と使用民族の分布

**東北部の諸民族** 以上のような諸書の記述によって、オロチョン族の例はあ

るものの、刀箸がモンゴル族の特徴的な食具とみなされていることは理解できる。しかしこれは誤りではないが、不十分な理解に過ぎない。

筆者は2002年7・8月に交換研究員として中国吉林省長春市の吉林大学に滞在した折に、中国東北部の各地の博物館を見学し、刀箸に関心をもって資料を収集した。事例の紹介を兼ねて以下にまとめておこう。

【内蒙古自治区】 この折の資料収集で最初に刀箸を見たのは長春の西方にある通遼市でのことだった。博物館見学の余裕はなかったが、市内の土産店でモンゴル族の刀箸を収集した。記念品ではあるが、刀の柄は駱駝の骨を板状に加工して挟み、切り金細工をした錫で柄頭部を飾っている。箸も駱駝の骨製で、刀とともにやはり切り金細工で飾った駱駝の骨製の鞘に納められていた。

自治区の北端に近くロシアと国境を接する呼倫貝爾市は、その草原一帯を、モンゴル民族発祥の地と称している。蒙古の民族名は『旧唐書』の「蒙兀室韋」<sup>(17)</sup>が最古とされており、蒙兀室韋が望建河（今の額爾古納河）流域に住んでいたからである。そのモンゴル民族発祥の地にある呼倫貝爾市民族博物館にはモンゴル族の刀箸が展示されており、特別に見学させていただいた翌日から開催される游獵游牧民族民俗文化展にも、オロチョン族の南西一帯に住むエヴェンキ（鄂温克）族の、刃幅が広く頑丈な作りの刀をとまなう狩猟用の刀箸2点があった。なお、博物館内のミュージアムショップで土産用の刀箸を売っていた。

呼倫貝爾市内にはエヴェンキ族の自治県があり、鄂温克博物館がある。見学したところ、ここにもエヴェンキ族の狩猟用の刀箸2点が展示されていた。獵刀すなわち狩猟用の刀と表示されているが、鞘に納められていて刀を見ることはできなかった。ことに図2の右側の例の鞘幅や柄幅から想起されるように、刃幅の広い頑丈な作りの刀であろうと思われる。ただ、呼倫貝爾市民族博物館で見たエヴェンキ族の獵刀（刀箸）にくらべ、やや華美さがある。

ところで呼倫貝爾市は同地で開催される「中国北方游牧民族揺籃學術研討会」<sup>(18)</sup>に参加するために訪れた。研討会の懇親会で同席したダフル（達翰爾）族の研究者と話しをする機会があった。オロチョン族の南、エヴェンキ族の東



に居住の中心があるダフル族の刀箸についてうかがったところ、モンゴル族のものと同じ形態だが、大型獣を狩猟したときの解体用にも使えるように刃の幅が広いとのことだった。実物を確認したわけではないが、モンゴル族の刀箸の写真を見せて、これと同じ物を使用するかという質問への答えであるから、ダフル族の刀箸の使用は確実といえる<sup>(19)</sup>。

【黒龍江省】 哈爾濱市の黒龍江省民族博物館には、黒龍江省に住む少数民族の生活用具や衣服などを展示する民族文物陳列展覽があり、ここにモンゴル族・オロチョン族およびホジェン（赫哲）族の刀箸が展示されていた。

モンゴル族の刀箸は懐中刀箸と表示され、骨製の柄をもつ刀と同じ素材の箸が鞘に納められていた(図3-1)。鞘の細工は巧みで、有力者のものと思われた。

オロチョン族の刀箸はヘラジカ（オオジカ）<sup>(20)</sup>骨製の箸2点とともに展示されていたが、飾り気のない木製の鞘に刀と箸が納められている(図3-2)。

ホジェン族のものは2点あった(図3-3)。奥の1点は木製の鞘にやはり木製の柄をもつ刀と骨製の箸を納めている。刀は柄部の横幅からみて獵刀の名にふさわしく刃幅が広い。鞘は獣皮で覆われているが、その無骨さはこの刀箸が狩猟で実用されたことを物語っている。手前の1点は箸を欠いているが、木質部のみの飾り気のない獵刀であった<sup>(21)</sup>。

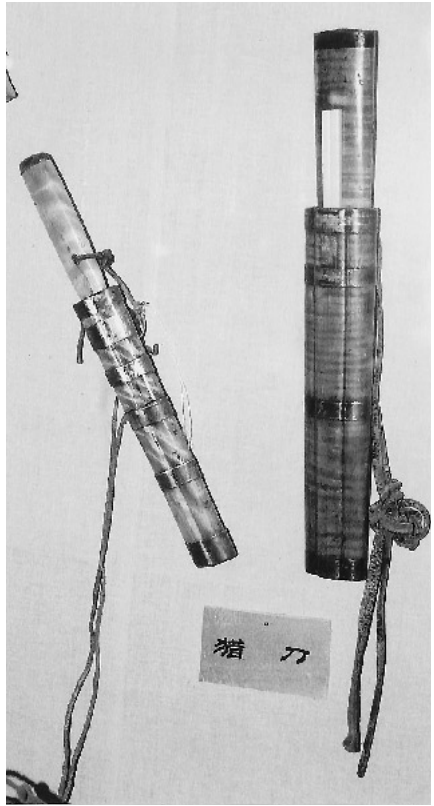


図2 エヴァンキ族の刀箸  
(内蒙古自治区・鄂温克博物館にて)

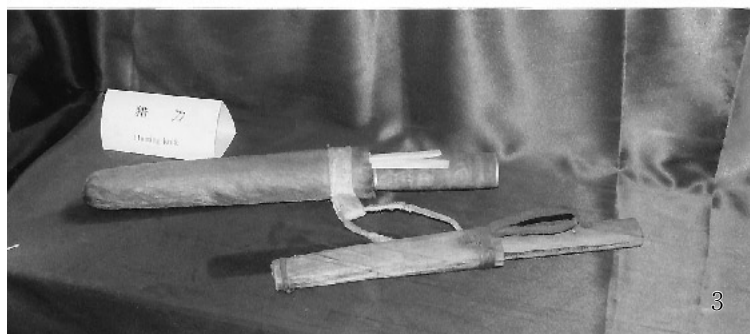


図3 モンゴル族・オロチョン族・ホジェン族の刀箸（黒龍江省民族博物館にて）

同じハルビン市の黒龍江省博物館の民族文物展示に清代の満族が用いた刀箸が展示されていた。時期を明示して刀箸を展示していたのはここだけであった。

ホジェン族は黒龍江省の東北端部に住む民族で、これから西に満族、さらにオロチョン族・エヴェンキ族・ダフル族が分布し、さらにモンゴル族に続く。つまり黒龍江省東北端部のホジェン族から内蒙古自治区のモンゴル族まで、刀箸の分布圏が帯状に広がることを確認できる。しかも満族・オロチョン族・エヴェンキ族・ホジェン族はツングース語族でモンゴル語族のモンゴル族とは言語の系統を異にするが、これらすべてが古代に室韋として同一民族視されていたことは、大いに注目すべきであろう。

【吉林省】 長春近郊の伊通県にある伊通満族自治県民俗館で、基本展示の満族文物陳列に刀箸が展示されていたが、食具として洗練された形態であった<sup>(22)</sup>。吉林省で満族の刀箸の展示を見たのはここだけだったが、中国の最後の王朝である清朝は満族が興したものだけに、ほかに例は多数ある。

このときに実見し、また確実な聞き取り情報で得た刀箸を使用する民族は、以上をまとめるだけでもモンゴル(蒙古)族・満族・エヴェンキ(鄂温克)族・オロチョン(鄂倫春)族・ダフル(達斡爾)族・ホジェン(赫哲)族の6民族に及び、広範な分布圏をもつモンゴル族を除けば、中国東北部に集中している。

**チベット族** しかし実際には、刀箸は中国の西部に住むチベット(蔵)族の間でも使われている。その形態はモンゴル族などの東北部の諸民族のそれと変わらない。たとえば、上海博物館の中国少数民族工芸館に3点の刀箸が展示されているが、モンゴル族の玉製の鞘に玉で飾られた柄をもつ刀と箸からなる蒙古族玉鞘餐刀とともに、鮫皮で覆われた木製の鞘を切り金細工で飾り、象牙をあしらった刀と象牙箸からなる蔵族鑿花鯊魚皮鞘餐刀と、切り金細工で締められた木製の鞘に同様の細工で柄頭部を飾った刀と象牙箸を納める蔵族鑿花木鞘餐刀の、2点のチベット族の刀箸がある。

この2点は上海博物館の展示資料にふさわしい洗練された装飾性に優れたものだが、一般に用いられるチベット族の刀箸はもっと実用的で土臭い。図4に

例を示すが、全長23.0cmのやや小形の1は、金属で成型し銀・銅・真鍮製の帯板で締めた鞘に木製の柄をもつ刀、象牙製の箸を納めている。鞘の長さは13.5cmで、金属で成型した後に、内側に木材を挿しこんで刀と箸を納める部位を分けている。刀を挿しこむ部分の外側の足に円環を取りつけ、そこに皮製の下げ緒をつけて腰に吊り下げられるようにしている。刃渡りが10.7cmと短い刀は鑄の厚さが5mmもあって鋭い切れ味をもっている。柄部は木製で、柄頭部に金属を象嵌して飾っている。象牙の箸は22.3cmあり、他とのバランスからすると長い。4種の金属の使い分けや柄頭部の象嵌など装飾性がないわけではないが、実用一点張りの武骨な刀箸である。

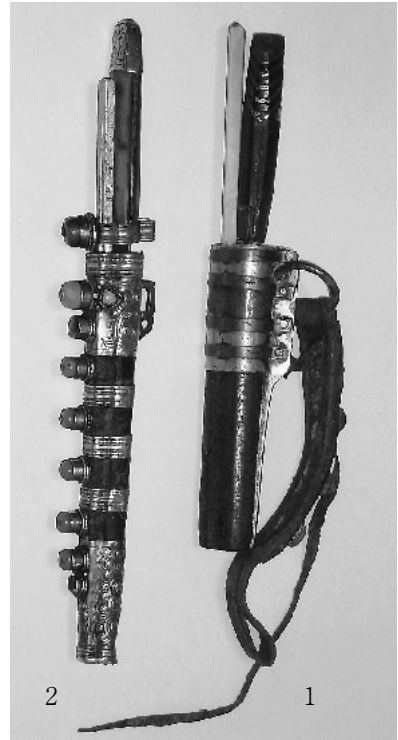


図4 チベット族の刀箸

これに対して全長28.1cmの2はていねいに作られている。17.5cmの長さで作られた鞘は木材を組み合わせて全体の形を整え、それを獣皮で覆い、さらに銀製の締め金具で留めている。表側にあたる箸挿入部の外には、獣皮の上に山珊瑚と緑色の石をあしらった銀板が縦方向に貼られていて、これも金具で締められている。締め金具および山珊瑚などの飾り板の台部は型押しされた渦文状の文様がみられる。刀は1と同様に刃渡り11.8cmと短い、厚さはやはり5mmある。柄部は獣骨製の板材で挟まれ、柄頭部型押し文で飾られた銀製の金具をかぶせている。刀を鞘に納めきれないため、山珊瑚で飾った別作りのつなぎの環を挟んでいるが、山珊瑚の位置を合わせると形状が異なってくる。山珊瑚での装飾はチベット族の刀箸の特徴でもある。箸は錫製で軽い。長さ17.5cm

で、断面正方形になる頭部の4面に鶴などの同じ文様を繰り返し打ち込んでいる。バランスからみて後補されたものであろう。1よりも装飾性があるが、やはり実用品である。

筆者は刀箸の実物資料の収集のため、長春や北京・上海などで古玩市場（骨董市場）を訪れたが、ここには清朝（満族）・モンゴル族とともにチベット族の刀箸が多く売られていた。中国東北部を遠く離れたチベット自治区を中心に、中国西部の広い範囲に分布圏をもつチベット族も刀箸を使用しているのである。またネパールの山岳少数民族のものという刀箸をネパール土産専門店で購入したことがある。店主には使用した民族の名前まではわからなかったが、店の性格と文化的・距離的なチベットとの親近性から出所を疑う必要はあるまい。

**刀箸の分布** このように中国東北部6民族と西部のチベット族およびネパールで刀箸の使用を確認できる。劉雲は先の書の第10章の少数民族の「飲食、礼俗、民間文芸与箸」で刀（ナイフ）・箸・手を食事に用いる民族としてオロチョン族・ホジェン族を挙げ、さらに主に手食であるが刀・箸でそれを補う民族としてモンゴル族・満族・エヴェンキ族・ダフル族・チベット族のほかにメンパ（門巴）族・ロッパ（珞巴）族・ユグ（裕固）族・トゥー（土）族・シボ（錫伯）族を挙げている<sup>(23)</sup>。シボ族は刀箸の使用を確認できる満族・エヴェンキ族・オロチョン族・ホジェン族とともにツングース語群の民族で、かつては大興安嶺一帯で狩猟・漁撈・農耕に従事し、室韋として同族視されていた歴史をもっている。トゥー族はモンゴル族と区別するため察罕蒙古爾と自称していたし、現在ではチベット語・文字を使用するなど、モンゴル族とチベット族の特色を兼ね備えている。こうした事実を考慮すると、さらに刀箸使用民族が増加する可能性がある。刀箸の使用を確認できた7民族に限って分布をみると2ヵ所に分離している感があるが、分布圏の広いモンゴル族とチベット族を介在させると、図5のように、漢族分布圏の外縁に接して帯状に分布していること、そしてそこは米食ではなく粉食・肉食地帯であることが理解できる。モンゴル族・チベット族と同様の食習慣をもつとされるメンパ族ほかの刀箸の実用を確認できていない民族の分布もここにある<sup>(24)</sup>。

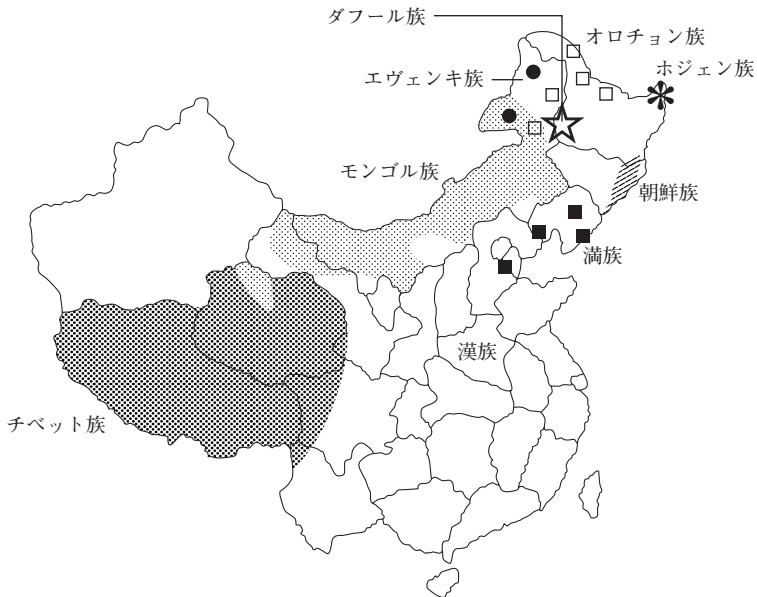


図5 刀箸使用民族の分布（中国内部）

#### Ⅳ 刀箸の使用開始に関して—李朝の粧刀—

Ⅲで述べた刀箸は、先述の黒龍江省博物館所蔵例や、劉雲が紹介する内蒙古自治区博物館所蔵の錫林郭盟収集の龍文蒙古族刀箸・嵌宝石刀箸などの清代の例が残っているものの、使用の開始期はわかっていない。これまでに開始期が論ぜられたこともないが、わずかに張競が唐と宋の交替する時期に食生活の様式に大きな変化が起こったこと、その一環としてそれまで横向きに置かれていた箸を縦向きに置くようになったことを指摘し<sup>(25)</sup>、使用時期の古さを示唆しているくらいである。この箸の置き方の変化については筆者も論考をまとめたことがあり<sup>(26)</sup>、張と同じ時期観をもっている。筆者には置き方を変化させる要因がわからなかったが、張は唐と宋の交替期にあった五代十国とよばれる北方少数民族の王朝に着目する。彼らは牧畜に従事し、肉食をしていたから、食事に刀（ナイフ）を用いる。刀の切っ先を自分に向けると怪我の元になるから、西

洋料理のナイフとフォークのように刀を縦に置くようになり、箸も刀に揃えて縦に置くようになったと張は推測する。現在のモンゴル族がナイフの切っ先を相手に向けることを嫌っていることに矛盾するが、魅力的な見解であると思っている。時期的には10世紀前半ということになるが、論拠となる文献・考古・民俗などの資料を欠いている。この張の見解が成立すると仮定しても、それはナイフとしての刀と箸であって、両者が同じ鞘に収納される刀箸とはまだ距離がある。

ところで、室韋とよばれたモンゴル族とツングース語群の民族に刀箸が共通することは重要である。室韋の韋はなめし革を意味する。そこに、毛皮を求めての狩猟を生業の一つとする室韋にとって刀箸は必需品であったろうし、そしてこれらの諸民族に基層文化として受け継がれる構成要素の一つであった可能性が強く示されている。しかしながらこれらの資料のみでは開始期を推定するにはいたらない。そこで視点を改めて別の角度から考えてみることにする。

韓国ソウル市の国立民俗博物館に、女性の装身具の一つとしての粧刀が多数展示されている。これには、刀箸とまったく同じ形態で小形化した一群と、刀箸から箸が脱落した小刀が鞘に納められたのみの形態の一群がある。後者の形のものは今でも市内の土産品店で売っている。そこでまず実例（図6）を検討しておこう。

1は全長18.9cmの短小な刀箸で、図1の1に示したモンゴル族のそれによく似た形態をしている。木製の鞘は刀を納める部分の外側に凸状の箸挿入部を設けており、全体を真鍮で締めている。長さ12.6cm。鞘口の少し下に付けた円環は、他例からみておそらくは飾りのノリゲを垂らすためのものであろう。刀は刃渡り8.9cm、全長17.0cmで、木製の柄の頭部に象牙を嵌め、鞘頂部に飾り金具をあしらっている。箸は象牙製で、14.6cmと短い。なお、ノリゲとよばれる垂れ房は韓国の国立民俗博物館の諸例にならって筆者が付けたものだが、胸元に挟んだ刀箸から垂れ下がって衣裳を引き立たせる。

1は木製鞘、象牙で飾られた木製柄の刀、象牙箸からなるが、粧刀は銀粧刀ともいわれる<sup>(27)</sup>ように、大多数の鞘、刀柄部の飾り、箸が銀で作られている。

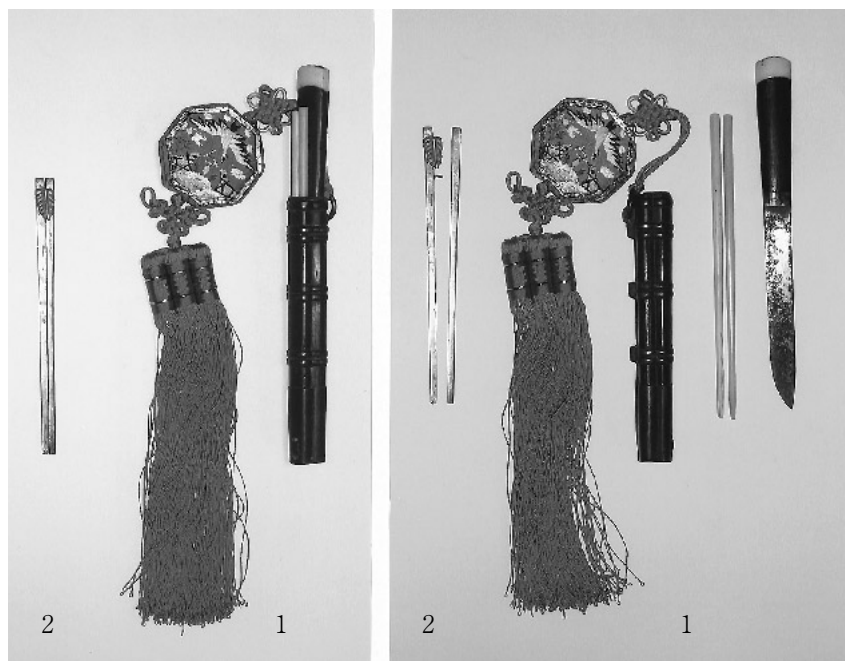


図6 李朝の粧刀（左：セットされた状態，右：組合せの状態）

2はそうした銀製箸の一例で、12.8cmと短い。片方の頭部に木の葉を象った飾りを付け、一对の箸を離すと一方に針状の突起、他方にそれを受ける孔を空け、身につけたときに歩行などの振動で動かないようにする工夫がされている。粧刀の銀製箸の多くには木の葉や海老などの飾り、針状突起と受けの孔がある。これによって一組の箸の動きは止まり安定するが、肝心の箸としての使用を不便にしている。

そこで、李朝の粧刀の用途が問題になる。粧刀というからには、産毛を剃るためといった化粧と関連するのではと思われる<sup>(28)</sup>が、用途は明らかでない。これについても専論がないので、参考までに一色八郎の解説<sup>(29)</sup>を紹介すると、

一三九二～一九一〇年（李朝）時代には「粧刀」があり、金属製の小型（全長約一六センチメートル）鞘に、刀と箸がセットされ、それぞれに模



様が彫りこまれている。これは実用というより女たちの装飾品と思われるが、古くは、内乱の際この懐刀で敵に立ち向かい、あるいは自刃したとある。

というように、古くは女性の身を守る武器として、あるいは敵からの凌辱を避け貞節を守るための自殺用の機能をもっていたが、現在では装身具となっているとしている。「自刃したとある」というように確証はないらしく、尹瑞石も「公認された話ではないが」と断りながら同じ主旨の説明をしている<sup>(30)</sup>。しかも、粧刀の実例の多くにともなう銀製の箸の説明が欠けている。箸に造詣の深い劉雲も粧刀にふれているが、一色八郎の著書を参考にしたのであろうか、一色とほぼ同様のことをいっている<sup>(31)</sup>。その性格を実用品および装飾品としているが、実用品の意味は一色のいう身を守るために「敵に立ち向か」うということの踏襲であろう。ともあれ、箸の専門家である一色や劉が箸の性格にふれないのは奇異としかいいようがない。

モンゴル族・チベット族などの諸民族の刀箸との形態の一致、装飾品では説明できない箸の存在に関心を抱いた筆者は、ソウルの国立民俗博物館で粧刀を見学した折に、粧刀の性格を尋ねたところ、銀製箸は基本的には食事用と解説された。短すぎることや針留、飾りから実用に適しないのではと問うたところ、主君・主人に仕える女性が食事の給仕をする際に調理された食の数々にこれを刺し、毒が盛り込まれていないことを確認するのに用いるとのことだった<sup>(32)</sup>。毒素に触れると銀が黒化する性質を利用しての、毒殺防止用の道具ということになる。これもまた確証のない説明だが、一色らよりも実相に近い推論と考えている。

そうであれば、銀製箸も刀も重要な役割をもつことになる。そして毒味の機能が求められなくなったときに箸は無用になる。それが粧刀に箸をともなう一群と刀のみの一群が存在する理由と解釈できる。

粧刀が用いられた李朝時代の朝鮮は、刀箸分布圏の中国東北部に隣接しており、形態の一致は両者に関連があることを示している。つまり形態と用途の変化を整理すると、

- A 中国東北部の諸民族の刀箸の伝播もしくは騎馬民族の系譜をもつ朝鮮族での使用
- B 朝鮮での刀箸の小形化と、狩猟用から毒味用・自刃用の懐刀への性格の変化
- C 同じ形態ながら、毒味用から自刃用への用途の比重の転換
- D 自刃用の可能性を残しつつも、粧刀の名称に象徴される化粧時の使用を含む装飾品への性格の変化
- E 刀箸から箸が脱落し、懐刀の痕跡を残す刀も、自刃とは無関係なまでの装飾品化

という変遷が明らかになる。このように考えると、図6に示した木製鞘、象牙で飾られた柄をもつ刀、象牙箸からなる刀箸は、木製であることや全体から受ける質朴な印象から、李朝の粧刀としては古期のもと判断できる。1392年建国という李朝の長い歴史から、これらの変化が李朝以前あるいは李朝のどの段階で生じたのか、検討しておきたい<sup>(33)</sup>。

相似した形態の粧刀を除けば、李朝を含め、朝鮮半島にA段階とした刀箸の使用の形跡は知られていない。それは粧刀への変容が相当に古い時期であることを示唆している。中国に分布する朝鮮族は近世に朝鮮半島から移住してきた人びとの後裔であるが、それ以前が無関係であったわけではない。ことに、朝鮮族が朝鮮半島北部に建国した高句麗（～668年）の後継国家である渤海（698～926年）の、ロシア沿海州から中国東北部、朝鮮半島北部におよぶ版図が、室韋とよばれた諸民族と接触し一部重なることは十分注目できる。また朝鮮半島南西部にあった百済の最後の王都泗泚は扶余族を祖先とする伝承にちなんで扶余とも称されたが、その扶余族は吉林省西北部に分布していた。やがて朝鮮族は朝鮮半島に収斂し、17世紀末頃から再び現在の中国領内に移住するようになる。こうした朝鮮族の動向からすれば、粧刀のモデルとなるA段階の刀箸と遭遇する機会は、渤海時代近くまでさかのぼりうる可能性を有している。それが先に相当に古い時期とした一点であり、張競の指摘する10世紀前半の年代観に近づいたものになる<sup>(34)</sup>。

## V 刀箸研究の現状

以上述べてきたように、刀箸は、李朝の粧刀を含めれば、ネパールから朝鮮半島にかけての広がりをもつ。それは本来、室韋とよばれた狩猟・漁撈・農耕を生業とする民族が大型獣などの獲物を解体するために使う刀を食事にも使うために箸とセットにして携帯の利便性をはかったもので、漢族の生活圏の外縁にいるモンゴル族・チベット族ほかの狩猟民族が使用をはじめたと考えられる。こうして非日常的な狩猟の道具の一種として発生する。その開始期を明示する考古・文献などの資史料に不足があるものの、社会的歴史的環境を考慮すれば、10世紀頃までさかのぼりうる可能性を想定しうる。

刀箸の鞘に装備される箸は、刀箸が漢族の生活圏の外縁で使われていることから、漢族から波及してきたと考えてよい<sup>(65)</sup>。そしてこれらの刀箸は、時間の経過とともに、日本の割り箸に匹敵するような簡便さをもって日常の食卓にも供されるようになり、李氏の朝鮮王朝では、本来男性用・狩猟用であった刀箸が女性の懐刀、さらには装身具に変容していく。そして現代では、欧米風のナイフとフォークを用いる生活の影響もあって、刀箸分布圏の諸民族もそれをナイフと箸に置き換え、セットとしての刀箸ではなく、それぞれに個性をもつナイフと箸として別に用意されるようになっていく、とまとめることができる。

わずかな期日の内蒙古自治区の旅だったが、刀箸を使う光景は一度も目にすることもできなかったし、都市部ではすでに歴史遺産としてしか知られていなかった。肝心の刀箸の出現期を明確にすることはできなかったが、消えゆく刀箸を記録に残す小論の目的を果たしたところで、擱筆する。

### 註

- (1) 高倉洋彰「倭人手食考」(石野博信編『初期古墳と大和の考古学』)学生社、2003年、161～162頁。
- (2) 中国では箸のことを筷子あるいは筴とよび、刀箸のことも刀筷子・刀筴といふことが多い。ただ、後に紹介する劉雲は著書や主催する陳列館の名称に「箸」を用いており、刀筷子・刀筴も刀箸と表現している。

- (3) 犴骨と表現される種類の骨。註(20)参照。
- (4) 一色八郎『箸の文化史』御茶の水書房, 1990年, 136・137頁。
- (5) モンゴル人民共和国は1990年に制定した新憲法で国号をモンゴル国と改めている。この部分および後述の部分では引用原文にしたがってモンゴル人民共和国のままにしている。
- (6) 一色八郎『箸(はし)』カラーブックス816, 保育社, 1991年。
- (7) 向井真理子・橋本慶子『箸(はし)』ものと人間の文化史102, 法政大学出版局, 2001年, 139~140頁。
- (8) モンゴル族の生活誌をまとめられた野沢延行氏によれば, 著書を刊行された1990年頃でも, 刀箸は一家に一つくらいはあるものの, 購入することすら難しいと紹介されている。

野沢延行『モンゴルの馬と遊牧民』原書房, 1991年, 116・117頁。
- (9) 納日碧力戈編『蒙古草原文化卷』(『中国地域文化』上)山東美術出版社, 1997年, 1901頁。
- (10) 中国語文献の訳出にあたっては, 西南学院大学講師金繩初美氏に大変お世話になった。
- (11) 劉雲編『中国箸文化大観』科学出版社, 1996年, 250~251頁。
- (12) 火鏟とあるので火打金の意味となるが, 実例からみて, 火打石と訳しておく。
- (13) 四不像是鹿に似た奇獣とされ, 角をもつ雄の頭部は鹿, 脚(蹄)は牛, 尾(身体)はロバ, 首は駱駝にそれぞれ似ていながら, 全体にはどれにも似ていないことからこの名がある。実際には馴鹿(トナカイ)を指すことが多い。
- (14) 劉雲前掲書図版36, 図4-67。
- (15) 1988年8月20日にNHKで放映された「秘境興安嶺をゆく」の第1回「狩猟の民オロチョン」による。
- (16) 萩原真子「民族と文化の系譜」(『東北アジアの民族と歴史』民族の世界史3)山川出版社, 1989年の78頁掲載の写真では, 脇差のように腰帯に差している。刀箸であることの確認はできないが, このような刀箸の帯刀法も想定できる。
- (17) 蒙兀室韋は『旧唐書』北狄伝室韋条に

大山之北有大室韋部落, 其部落傍望建河居, 其河源出突厥東北俱輪泊, 屈曲東流經西室韋界, 又東經大室韋界, 又東經蒙兀室韋之北落俎室韋之南, 又東流與那河忽汗河合

とある。『新唐書』北狄伝室韋条では

北有大山, 山外曰大室韋, 瀕於室建河, 河出俱倫池而東, 河南有蒙瓦部

というように, 蒙瓦となっている。なお, ここでいう「室韋」は民族・種族の名称で, 現代のモンゴル族・満族・オロチョン族・エヴェンキ族・シボ族・ホジェン族がその後裔と考えられているが, モンゴル族以外はツングース語群の民族であるという共通項をもっている。

- (18) 2002年8月9日から13日まで呼倫貝爾市海拉爾の烟草賓館を会場に開催され、  
内蒙古自治区文物考古研究所副所長の塔拉氏ほかに大変お世話になった。
- (19) 刀箸であると確認できないが、王輔世編『中国諸民族服飾図鑑』柏書房、1991  
年の37頁に、小刀を腰の左斜め前に差したダフル族の男性像が描かれている。
- (20) 犴骨箸と説明されていた。犴はヤマイヌ、ノライヌを指すこともあるが、駝  
鹿すなわちヘラジカ（オオジカ）を意味することが多い。この場合は、地域的に  
みて、ヘラジカ（オオジカ）であろう。
- (21) 于曉飛『消滅する危機に瀕した中国少数民族の言語と文化』明石書房、2005年  
の口絵写真35に、前腹部に刀箸を吊るしたホジェン族の男性がある。
- (22) 伊通満族自治県民俗館を訪問した日は休館日で、吉林大学外事処の劉峰氏の連  
絡と同行で見学できた。民俗館の張文彬氏などに案内されたが、メモをとる余裕  
はなかった。
- (23) 劉雲前掲書204～205頁。
- (24) モンゴル族、チベット族をはじめ、中国に隣り合うロシアやモンゴルなどに民  
族の分布が広がる例があり、モンゴル国におけるモンゴル族の例を除いて確認で  
きていないが、そこでの刀箸の使用は当然考えられる。
- (25) 張競『中華料理の文化史』ちくま新書124、筑摩書房、1997年、172～174頁。
- (26) 高倉前掲論文164頁。
- (27) 伊原亜人・大村益人ほか監修『朝鮮を知る事典』平凡社、1986年、105頁。
- (28) 伊原・大村ほか前掲書では、粧刀・銀粧刀は「化粧」の項目で解説されている。
- (29) 一色前掲書139頁。
- (30) 尹瑞石（佐々木道雄訳）『韓国食生活文化の歴史』明石書店、2005年、218頁。
- (31) 劉雲前掲書243頁。
- (32) 国立民俗博物館で教示を受けたが、相手の姓名、職業などについては不明。
- (33) 李朝には先に紹介したノリゲとよばれる垂れ房飾りがあり、これをチョゴリに  
着けることで化粧が終わる。そのノリゲのなかでも重要なものにサムジャク（三  
作）とよばれるノリゲがある。3種類の化粧道具をあしらったノリゲを3本一組み  
にして垂らすのだが、母娘で代々伝える家宝になっている。
- 最近話題をよんだ韓国ドラマ「チャングムの誓い」で、少女時代のチャングム  
が父からサムジャクノリゲをもらう場面がある。この場合は筆、墨入れ、銀粧刀  
だった（キム・ヨンヒョン『大長今テジャングム』上、角川書店、2006年、16頁）。  
李朝の燕山君の時代の16世紀初頭のことで、すでに銀粧刀があったことや、この  
銀粧刀に箸が付属しているかどうかは確認できないが、サムジャク自体はすでに  
存在しており、刀箸状の粧刀が存在していた可能性はある。
- (34) 野間清六編『春日権現験記絵』（『新修日本絵巻物全集』16）角川書店、1978年  
の図版3に、藤原元弘が天曆年間（947～957年）に竹林殿を造営している場面が  
ある。建築現場で働く大工の姿が描かれているが、食事の一人の腰に刀箸らし

きものが差されている。他の大工の腰刀、あるいは他の絵巻物に描かれた大工の腰刀に箸は認められず、何よりも述べてきた刀箸の性格や使用法は稲作農耕民族である日本人には無縁で、おそらくは柄の装飾や小柄などの表現であろう。ただ、「春日権現験記絵」は1309（延慶2）年に左大臣西園寺公衡が奉納したもので、古代日本がもっとも頻繁に交流し毛皮類を競って求めたのが渤海であるだけに、気がかりな絵である。

- (35) 新中国の成立後、手食であった少数民族に箸食が普及している。その普及は、まず富裕層あるいは漢族との接触の機会の多い知識層からはじまり、次第に全体に及んでいる。箸食をすることが富裕あるいは文明理解の目安の一つとなっているのである。

同じことは日本でもあり、たとえば北海道千歳市の美々8遺跡の出土品から、アイヌ民族が本土との交流の結果として箸を受け入れていることがわかる。美々8遺跡では、樽前b火山灰（1667年降下）と樽前a火山灰（1739年降下）に挟まれた黒色遺物包含層から、アイヌ民族固有の宗教儀礼にもちいる木幣・木札・花矢・捧酒箸などとともに本州からもたらされた木製の箸と椀が出土していて、この時期に本州との接触で箸が伝わってきたことを示している。

文化庁文化財部「新指定の文化財」（『月刊文化財』501号）、2005年、42～43頁。